
短編集

哲也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N63990

【作者名】

哲也

【あらすじ】

投稿小説がにぎやかになってきたので、短編集小説をまとめることにしました。感想をくれた方、評価してくれた方、お気に入りに登録してくれた方。そんな数少ない方々、申し訳ございません。此処に感謝と謝罪の一文を載せさせていただきます。

僕は魔法使いになりたかった

薄暗い部屋の片隅、窓際に置かれたシェードランプは柔らかな琥珀色の影を落としていた。白い天井に浮かび上がる重なる影は幻想的で、僕は今夢の中を漂っているのかと考えてしまう。けれども右腕に走る痺れが現実であると教えてくれている。

僕は目を閉じる。

僕は僕に、今幸せなのかと尋ねる。

僕は僕に答える。

『分からない。ただ、つまらない決まりきった毎日にはほんの少しだけ花が添えられたようで、それは素直に嬉しいと思う』と。付け加えて僕は思った。ただ一つ難点なのは、この横たわるキングサイズのベッド。スプリングが利きすぎてちよつと腰が痛い。

『年甲斐もなく頑張るから』と僕が笑った。

「違う」と僕も笑った。

時計に目をやると、後五分程で日付は変わろうとしていた。もうすぐ僕は一つ年を重ねる。

僕の中の僕が尋ねる。

『彼女は僕を責めるだろうか』

『かもしれない』

『僕は怖くないのか』

『怖い。とても。僕はもう二度と彼女に会えない。その資格を失ってしまった』

『これは裏切りなんだろうか』

『分からない。けれど……』

『けれど？』

僕が願っていたのは本当。僕が守り続けたのも本当。

僕は魔法使いになりたかった。

何時も通り定時に会社から開放された僕は、何時も通りの道をたどる。

クリスマスを後少しに控えて、街は色鮮やかに飾り付けられている。師走とあって、街は何処か騒がしく、そして何もかも目まぐるしく動いている。

早足に何処かへと急ぐ人達には、骨身に染みるこの北風も心地の良い爽やかな風に感じるのだろうか。寒さに耐え切れない僕は、背中を丸め、コートのポケットに手を突っ込んで、小走りに行きつけの店へと急ぐのだ。

大通りの一本奥にあるJ a z z barは相変わらず閑散としていた。

初老の恰幅の良いマスターは慣れたもので、もう僕の顔を見るなり洋酒に手を伸ばし、いらっしやいとニヤリと笑いかけた。僕はこくりと頷くと何時もの場所、カウンターの隅へまっすぐに足を伸ばし、其処を陣取る。

やがて出された琥珀色の飲み物。からんと鳴らして、僕はそいつをゆつくりと喉に慣らして行く。そのうちそれはやって来て、僕をふわりと宙に浮かべてくれるのだ。そうすると僕は目を閉じて音楽に耳を傾ける。

J a z zのことなんて僕は何もしらない。この、何とかと言う誰かの曲が一体どんな意味を持っているのか、そんなことはどうだつてよかった。僕はこの音に体の端を寄りかかせてほっと一息つくだけ。それだけで十分だった。

一杯を飲み干した。もう一杯を頼む。そしてこの一杯を飲み干して、僕は帰宅に就く。

それは何時もと同じ。何時もと同じ時間に仕事を終え、何時もと同じ通り道を辿り、何時もと同じ店を訪ね、何時もと同じ酒を飲み、そして何時もと同じ、誰もいない家へ帰る。何時も同じ。同じ毎日。

だが何故か、今日の僕の隣には女性が座っているのだった。

一回りは年が離れてるだろう若い女性だった。

彼女は、横良いですか？ と笑顔で尋ねると、僕の答えも待たずに軋む古い椅子に腰掛けた。戸惑う僕のことなど意にも介さずに、彼女は話を始めた。挨拶と軽い自己紹介。世間話。取るに足りない話を。

僕を誰かと間違っているのか。それとも何かの勧誘なのか。そう思ってしまった僕は警戒を強めた。でも、どうやら違うらしい。彼女が言うには、毎日やって来て、何時も直ぐにふらりと出て行ってしまう僕のことの前々から気になっていたんだそうだ。

僕が毎日来ている事を知っていると言うことは、彼女も毎日この店に来ているんだろうか？

そう尋ねると、そうだと彼女は頷いた。全然気付かなかった。それはそうだ。だって貴方はずっと目を閉じてるんだから。彼女はそう言うと言つと屈託なく笑った。

無口な僕が言うのもなんなのだが、彼女は話が上手だった。話題が豊富で、次から次に言葉が湧いてくる、そんな感じだった。かと言つてそれは一方的なものではない。僕の短い言葉にも耳を傾け、更に僕から新しい言葉を引き出してくれる、そんな巧みさがあった。話が進むと酒も進む。一杯、また一杯と、知らずうちに僕はまた酒を頼んでいた。

ふと周りを見ると、あれだけ人がいなかったこの店に人が集まり始めていた。

ざわつく店内に僕は少なからずホツとした。あまりの客のいなさに、何時か潰れてしまふんじゃないか、そう危惧していたからだ。どうやら僕の杞憂は余計なお世話だったらしい。彼女が言うには、この店のマスターはJ a z zの世界では有名な人だから、潰れるな

んて事はまず有り得ないのだそうだ。そう言われるとただの白髪の太ったオヤジが、急に貫禄と品のある爺さんに見えてくるのだから不思議だ。

当然ながら、僕の知らないことは山のようにあるわけだ。

僕はたまたま止まった世界を見ていたようなもので、その世界からほんの少し後ろから押ししてくれただけで、驚くような新鮮な世界が待っていた。僕は急に胸が高鳴ってくるのを感じた。

今夜は何だか色々とある日だなあ。僕は呟いた。彼女が不思議そうに僕に尋ねる。いやね、実はもう数時間程で僕は四十歳になるんだよ。そう言うと、おめでとございます、と彼女が手を叩いて喜んだ。お互いの本当の名前すら知らない。なのにそう言ってくれるのが嬉しくて、僕はありがとと素直に礼を言った。

奥さんとお子さんが待つてるんじゃないんですか？早く帰らなくて大丈夫ですか？

僕はその問いかけに首を振る。恥ずかしいけど、僕は寂しい独り者だよ。自嘲気味な言葉を隠す為に僕はからからと笑い、四十歳になつたら願いは叶うのかなあとつい口にしてしまった。当然、彼女は願う？と尋ねてくる。

僕は返答に窮した。酒に酔ったから？ 陽気に中てられたから？ どちらにしる失言だった。急に押し黙った僕を見て彼女は心配げな顔を浮かべる。僕は頭を掻いて誤魔化したくなる。

僕は魔法使いになりたいんだよ。

彼女は声を出して笑い、子供の頃からの夢ですか？ 可愛いじゃないですか！ でも、どうして魔法使いなんですか？ そう尋ねた。

僕は、いよいよ追い詰められた。

僕は彼女の目をじっと見つめた。笑顔だった彼女の顔がすっと真顔になる。ああ、目だ。あの目だ。僕は気付いていたけど気付かない振りをしていた。彼女の眼差しはあの人にそっくりなのだ。僕はその目から顔を背け、グラスを両手に大事に抱えると、あの時の記憶を紡ぎ始めた。

昔、大好きな人がいたこと。

幼い頃から何時も一緒に、それが恋だと気付くのが随分遅くなったこと。

二人しか知らない秘密の場所で告白して、OKをもらい、キスをしたこと。

町の祭りに一緒に行こうと約束したこと。

待ち合わせの鳥居の前で待っていたけど、彼女は現れなかったこと。

翌日、彼女が交通事故で死んだと知ったこと。

「四十歳まで童貞を守ると魔法使いになれるって話を知ってる？」

答えはない。構わず僕は続ける。

「そんなバカな話、もちろん僕だって信じちゃいない。けれどね、もしその話が本当なら、僕は魔法使いになりたい。魔法使いになって彼女を蘇らせた。あの時に戻りたい。そう願ってるのさ」

グラスの中に浮かんでいた氷はすっかり解けて、単なる水割りになってしまっていた。僕はそれをぐいっと飲み干し、一息ついた。話している間、いや、話を終えてからでも、僕は彼女の顔を見れなかった。未だに童貞でいる僕を、彼女が気味悪げに蔑んで見るから？ それもあるが、それ以上に、彼女と良く似た眼差しをした彼女が泣くのはもつと耐えられなかったからだ。

鼻をすする音の後、搾り出すような声で彼女が何事か呟いた。僕は顔を伏せた。言ってしまったことを後悔し始めた矢先、

「でも、残念ですね」

「えっ？」

意外な言葉に思わず顔を上げた僕。視界が急に真っ暗になり、甘い香りと唇に柔らかな感触を感じた。

「だってその願いは叶わないから」

上目遣いのクスリと笑う彼女の赤らんだ顔を見て、僕は何にも言葉が浮かんでこなかった。ただ、耳まで真っ赤だったろう僕の顔には、はつきりと答えが浮かんでいただろうと思う。

店を出て僕達は街を歩く。

乾いた北風が吹き付ける、あんなに寒かった街が暖かいのは何故？彼女の手と僕の手が、僕のコートのポケットの中でしっかり重ねられているから？

あんなに眩しくて居心地の悪かった、色鮮やかに飾られたイルミネーションがこんなにも綺麗なのは何故？

そこに答えなんて求めてない。一人、J a z zに耳を傾けていたあの頃と同じ様に。

目を開く。ホテルの一室。シェードランプに照らされる僕達の影が天井に浮かび上がっている。

時計は0時を過ぎていた。僕の腕に頭を預け、軽やかな寝息をたてる無防備な彼女。彼女の長い艶やかな髪を撫でながら、僕は僕に尋ねた。

僕は魔法使いになれなかった。

けれど彼女を守る騎士にはなれるかな、と。

答えはなかった。

ただその代わりに頭の隅で、懐かしい、華やいだ笑い声が聞こえたような気がした。

幸せなら手を叩こう

冬の日のある夜、僕は行き付けのガード下のおでんやに立ち寄った。

珍しく雪の降る晩で、もしかしたらそれも祟ったのかもしれない。四人も居れば狭く苦しくなってしまう小汚い屋台には、客が僕だけしかいなかった。

しみつたれた酒も嫌いじゃない。好きなはんぺんと屋台の主との別段面白くも無い世間話を餌に、僕はちびちびと熱燗を重ねていた。するとふらりと一人客がのれんをくぐった。

「おっちゃん、ビール。大瓶大至急な」

やって来た客は低い張りのある声でそう頼むと、どっかりと僕の横に腰を下ろした。渋い声の割には随分と貧相で汚らしい格好をしたおっさんで、頬は痩せこけ、目はぎよろりとして妙な迫力があつた。口や顎に蓄えた長い髭がまたそう思わせたのかもしれない。

おっさんは差し出されたビールとコップを奪うように取ると、そわそわしながらビールを注いだ。そして駆けつけ一杯だとばかりに喉を鳴らして実に美味そうにビールを飲み干し、大声で息をついだ。

「あー、美味しい。やつぱ仕事中のビールは最高やな」

おっさんは舌なめずりして、ちくわと大根とたまご、それから熱燗を頼むと、また直ぐにビールを注いだ。僕はそれを見ていたら何だか嬉しくなつてしまつて、おっさんに話しかけてしまった。

「お父さん、良い飲みっぷりですね」

「……お父さんやと？」

何が不快だったと言つのだろうか。ぎよろりとした目を更に剥いて、おっさんは僕に汚い言葉を投げつけてきた。

「おいコラ、わしはお前みたいな何処のもんかもしれん醜い盆暗に大事な息子突き刺すつもりないぞ。それに、わしはこつ見えてもヤングや。young, younger, youngestや」

なんと返事をすればいいんだ。やっぱり、「なんでやねん」と胸を叩かなければいけないんだろうか。それはどうも負けたような気がして仕方なく、だから僕は頭を下げて謝ることにした。

「四十代半ば位だと思っていました。すいません、お父さん」

おっさんはにやりと笑った。

「正確に言う二千五十歳やけどな」

「デーモン閣下よりもお若いんですね」

「ああ。悪魔はごつつ怖いでな。あれにはよう敵わんわ」

面白いおっさんである。そしてよく飲みよく食うおっさんである。まるで辛い断食を終えたばかりの修行僧のような喰いつぷりで、やって来たおでんと大瓶のビールをいとも簡単に胃袋に押し込んでしまった。果たして修行僧が酒を飲んでいいのかは知らないが、陰しく厳しい顔と風体は、確かにそんな風に見えた。

おっさんは続いて、ちくわと大根とたまご、同じ注文を繰り返した。レパトリーは結構貧弱なようであった。僕はちよつと心配になっちゃった。

「お父さん、さっき仕事だと聞きましたが、そんなに飲んでも大丈夫なんですか？」

「アホ。そんなもん構うか。こっちは毎日毎日うんざりする程仕事してんのや。その上今日はしこたま忙しいとけつかつて。前々から分かつてはいたんやけどな、いい加減わしも腹立ってきてん。そやから今日はもう店じまいや。店じまい」

おっさんはえらい剣幕でそう捲くし立てた。余程ストレスが溜まっているようだった。僕はおっさんを余り刺激しないようにして、ガス抜きを図ることにした。

「大変ですね。一体何の仕事をしたらっしゃるんですか？」

くちやくちや音をたて、はんぺんを食していたおっさんは上目遣いになって、

「ああ……、なんて言えばええんやろな。告白とか悩み事とか……、まあ、あれは愚痴聞いてるんやな」

とそう言った。

世の中には奇妙な仕事もあるもんである。僕はちびちび飲んでいた酒を一気に飲み干しまた注いだ。熱爛が出てくるまで手持ち無沙汰なおっさんに「子供相談室みたいなお仕事ですね」と、おちよこを伸ばす。

「お、ありがとな」

おっさんは片手で僕を拜んでおちよこを受け取り、くいと一気に飲み干してしまった。「しびれる〜」と体を震わせ、「やっぱり冬は熱爛やな。冷えた体によく暖まるわ」と、しみじみ呟く。そりゃ冷え切ってるはずだろう。そんなボロ切れ纏っただけの格好でいたんじゃ。

「お、そんでな。なんの話しとったかな？ お、そうか。わしの仕事の話か。なに？ 子供相談室？ お前おもしろいこと言うな。正にそれやがな。あいつ等ホントしょうもない。どうでもいい事べつらべらべつらべら。悲劇のヒロインぶりやがって。分かってへんねん。自分が脇役の分際やってな」

「はあ、脇役ですか」

「あ、言つとくけどな、わしは脇役を馬鹿にしてるんやないで。身の丈を知れ言つとんのか。脇役つてのはやな、どんな物語にも必要不可欠なもんや。そんで良い脇役がいる物語はな、いい味が出た深みのある物語になるんや」

なんとなく、僕は屋台の主に目をやった。頭がすっかり禿げ上がったおっちゃんは俯き、ただ黙々と手を動かしていた。いや、ただなんとなく。

「まるでおでんみたいですよな」

おっさんはぽんと手を叩いた。

「自分ほんまおもしろいなあ。感心するわ。正におでんそのものやがな」

感激したおっさんは僕の手を無理矢理取り、ぶんぶんと振った。未だによく分からないのだが、なんでおっさんの手の平には風穴が

開いていたんだろう。しかも両手とも。もしかしてそのスジの人だつたんだろうか。だとしたら、僕は知らずとは言え、えらい約束を取り付けてしまったものである。

「おでんてのはどれもこれも他の料理じゃ主役になれん物の集まりやわなあ。それがこんないい味出すんや。人はおでんやおでん。うん、おでんや」

などと言っておっさんはたまごを口に放り込んだ。そのたまごは十分主役になれると思ったのだが、気分を良くしてる所にそれを言ってしまうのは気が引けた。それに既にその時、僕は深く静かにとある計画を進めていたのだ。おっさんをおだてて、この店の勘定をおごってもらおうという、狡つ辛い計画を。

「自分、嫁さんはおるんか」

待ちかねた熱爛がやってきた。おっさんは嬉しそうに受け取ると最初の酒を僕のおちよこに注いで返してくれた。中々律儀なおっさんである。

「いや、嫁さんどころか女もいません。恥ずかしいことですが」

「結婚なんかせん方がええと」

女など有象無象な生き物だ、と言わんばかりだった。好きになつた女を女神のように崇め奉り尽く振られる僕は、「はあ、そうですか」と気の抜けた声を返した。おっさんの冷たい言い草が理解できなかつたのだ。

「そや。あれは悪魔を越える化け物や。信じたら痛い目みるど」

「痛い目見ちゃいましたか」

「俺やない。ある男の話や。その男にはな、惚れに惚れぬいた女がおったんや。口説いて口説いて口説き落として一緒になって、ついに万感成就の夜がやってきた。むくむくーっとそそり立つ思いとナニを抱え込み、いざ突撃。撃ちてしまん戦いの始まりや」

負けられない戦いである。何がどうなると負けなのかは知らないが。恐らく世界中の男共はこの男に惜しめない声援を送るであろう。

「そんな時にや」

おっさんはくいつと酒を飲み干し、渋い顔を浮かべた。

「女が言いよったんや。『あなた、ごめんなさい。実は私身籠ってるの』」

かっくりとおっさんは事切れるように首を落とした。僕は愕然とした。耳を塞いでそこらじゅうわーわー騒いで廻りたい気分になった。

「ど、ど、どという事ですか？」

「そのまんまの意味やがな。女の腹の中には子供がおった。しかも自分の種でない子供がな。それだけでも男は怒り心頭や。それに輪を掛けて女は言いけつかった。『あなた、信じて。愛してるのはあなただけなの。それに私処女よ』」

「そんな馬鹿な」

「まったくもつてそうや。女が言いよるにはな、教会で神さんから子供を授かったそうや。そんなあるかい。教会で坊さんから子供授かったの間違いやろ」

えらい話もあつたもんである。俯いたおっさんはメラメラと火が点いたようであった。頭に乗っている荊の冠が額に突き刺さり、血がびゅーっと吹出している。何故そんな危険な物を被っていたのかは知らないが。

「それで、一体どうなつたんですか」

「それがやな……」

苦虫を噛み潰したようにおっさんは呻いた。

「認知したんや」

「まさか、自分の子供としてですか？」

「そうや。アホも大概にせい言うたりたいわ。嫁さん許して子供まで養って、ほんまにアホな男やわ」

おっさんは酒を注ぐとじーっとおちよこを眺めた。その顔は寂しそうな笑顔だった。

「お父さん、元氣出してくださいよ」

僕はおっさんの背中を摩った。おっさんはその手を払いのけて、

「だからわしやない。ある男の話や言うてんやろ」
顔を真つ赤にしてそう怒鳴った。まあ、そういうことにしておこ
う。

そんな会話もあつて、二人でしーんとしてしまった。相変わらず
雪は降り続き、頭上を電車は通り過ぎていく。そして客はやつてこ
ない。なにか楽しい話題はないかしらん、と僕はあれやこれや頭の
中のネタ帳から引つ張り出しはするものの、どうにも口にするこ
が出来なかつた。

そのうち、おっさんがぼつりと零した。

「しかしまあ、どんなに時代が変わつても、人は変わらんもんやな」
「変わりませんか」

「変わらん。どいつもこいつもドアホばかりや。あれが欲しいこ
れが欲しい、無いものねだりのドアホばかりや。わしを誰やと思
つてん。そんなもん八百万の神にでも頼んどけいねん。でも中
にはおる。本当に救いが欲しい奴がな。ただ一言、許された、そう言
つて欲しい奴がな。みんな怖くてしゃあないんや。自分が正しいと
言いきれる奴が何処にいる？ 人は恐ろしく弱い。弱くて悲しい。
わしはそんな時、悲しくて虚しくなる。なにも出来ん自分の不甲斐
なさに口惜しくて仕方なくなるんや」

おっさんは深く深く頭を落として、ぐつと手を握り締めていた。
その手は震えているようだった。向こう側さえ透けて見えてしま
いそうな丸まつた小さな背中に、僕はたまらなくなつてしまった。

「お父さん、こんな歌しつてます？」

「歌？」

「幸せなら手をたたこう」
パンパンとおっさんは手を鳴らした。

「自分そりやまた幼稚な歌やなあ」

「いいじゃないですか。人間なんてみんな子供なんですから。いき
ますよ？ さん、はい！」

幸せなら手をたたこう
幸せなら手をたたこう
幸せなら態度でしめそうよ
ほらみんなで手をたたこう

「2番！」

幸せなら足ならそう
幸せなら足ならそう
幸せなら態度でしめそうよ
ほらみんなで手をたたこう

「3番！」

結局のところ、僕の思惑は失敗した。みすばらしい格好をしたおっさんは、やっぱりみすばらしかったのである。おごってもらおう所か、おっさんは持ち合わせが足りなかったのだ。警察に突き出されるのも忍びないので、足りない分は仕方なく僕が出すことにした。まあ大した額じゃないからよかつたけれど。

帰り際おっさんは僕の背中を叩いて、しゃがれた声でこう言った。「自分今日わしに会えて良かったな。お前さんの天国への片道切符はこれで約束されたでえ」

なんのこっちゃと思ったが、調子の良いおっさんに合わせて笑っておいた。後でどういう意味だったのか考えて僕は気付いた。今度会う時は、樂園天国パラダイス、それはそれはエツチなお店に連れられてくれるって事だと。僕はそういう社交辞令を真に受けてしまおう方なので、それからはまた輪を掛けて、足しげくおでん屋に通う

ようになった。けれどそれっきりおっさんは現れなかった。まあいい。僕が死ぬまでには、もう一回位は会えるだろう。その時は無理矢理にでも約束を守らせる事にしよう。

それにしてもと思う。十二月二十五日のあの夜出会った、あの奇怪なおっさんは結局の所何者だったんだろうかと。案外どこぞのお寺のお坊さんだったのかもしれない。今でも誰かの悩み事を聞いては、ドアホドアホと説教してるのかもしれない。浮気性の嫁にやきもきしながら。

おっさんに乾杯。

そして僕は今日も一人、おでん屋で杯を傾けるのだ。

愛人恋歌

十一月初日。その日は朝から冷たい雨が降り続いていた。

耳に届く静かな雨は線香焚いた辛気臭い話のようで、朝っぱらから鬱陶しいなと思っていたのだが、学校が終わり何時ものように彼の家でグダグダとしていたら、大して気にも留めなくなっていた。

無駄に広い和室の真ん中、どんと置かれた黒塗りの座卓に肘を付き、彼は庭を眺めていた。青白い頬の瘦けた横顔は酷く気だるげでむっつりとして見えた。別に彼の勘に触るようなことをしたわけじゃない。ただ単に彼が捻くれ者なだけなのだ。一応座布団やお茶やお菓子が用意されていたから、それなりに私は歓迎されていたと思う。……多分。

訪れるたびにそんな調子だったが、彼がどんな態度でいようと私は大して苦にならなかった。と言うより、どうでもよかった。その時私の膝の上には黒と白の子猫がいて、制服のスカートにしきりに噛み付きじゃれていたから。比べれば向かいに座る年齢不詳の枯れ木のような男なんて及びもつかなかった。

多分そんな思いが前面フルオープンだったんだろう。彼は小さく舌打ちをこぼし、「来い、アリサ」と子猫を呼んだ。けれどアリサはほんの一瞬だけ声に反応しただけで、またすぐにスカートに噛み付き出した。何時までたってもやってこない飼い猫に、彼は大げさに首を振り溜息を漏らした。

「まったく、誰を飼い主だと思ってるんだ、このバカ猫は」

彼は犬のような従順な生き物が好きだったんだろうか。本当はそうだったのかもしれない。顔立ちも何処か柴犬ぽかったし。だとするなら、彼にとって苦痛だっただろうか。奔放で、心まで誰かに飼われることなど決してない、丸くて鋭い生き物が傍にいたことは。

「痛っ」

「ごろごろと喉を鳴らしながら、アリサが手に噛み付いた。見ると

少し血が滲んでいた。私はアリサの首根っこを掴んだ。アリサは興奮して足をばたつかせたていたけれど、私の顔を見た途端にしゅんと大人しくなった。ちよつと可哀想だったけれど、その小さな灰色の濡れた鼻をピンと弾いた。短い悲鳴を上げて、アリサは身を振り私の手から離れると、開け放たれたテラス窓から外へと飛び出していった。

「何したんだ、今の」

「黙りました」

私はテーブルの茶のみを手を伸ばし、不審な目を向けてくる彼に弁明を続けた。

「猫はお互いに噛み付いて引掻いて、そうやってじゃれあいながら力加減を覚えてくんです。あの子には兄弟がいないから、誰かがそれを教えてあげなきゃいけない。でも」

「でも？」

「ちよつとやりすぎました」

遠くの方で雷がドーンと鳴った。それに併せて地面を叩く雨が気持ち強くなったような気がした。

「まあ、そのうち帰ってくるだろう」

そう言つと彼は、テーブルの真ん中の置き皿から煎餅を一枚取つた。そしてそれを二つに割り、私へその半分を差し出した。それから二人で煎餅をかじりながら、雨に濡れる庭を黙って眺めていた。

何があつた分けでもない。何をする分けでもない。私達はよくそうやって庭を眺めた。手持ち無沙汰もあつただけけど、木や花や季節のうつろいを感じられるものが一切ない、芝が敷かれただけの広い庭を眺めて何が楽しかったのだろうか？ うん、楽しかったのだ。ステンの庭柵の向こうに広がる長閑な田園風景や、色取り取りの豆粒のような車が行き交う姿や、下校する小学生達の黄色く可愛らしい通学帽が小さく跳ねる様が楽しかったのだ。感情を洗いざらい奪われてしまいそうな雲一つない真夏の真っ青な空もあつた。まるで魔法使いの為にあるようなそれは素敵な秋の夜だつてあつた。こん

な日のように全てが鉛色に染められてしまい、暗く冷たく静かに停滞しているかのように感じる時でさえも、私達は楽しかったのだ。それは何故か。この庭だけが唯一の外へと繋がる窓だったからだ。

「夜に跳ねる魚を知ってるか」

何時ものように何の脈絡もなく彼がそう尋ねてきた。リスのようになりかりと前歯で煎餅をかじっていた私はそれを止めて、首を捻り答えた。

「うーん、イルカ？」

彼は屈託なく笑った。「新説だな。グリーンピースやオージーに聞かせて激怒させてやりたいぜ」

「じゃあトビウオ」

「……トビウオか。成る程、似ているかもしれん。そういえば何時だったか、トビウオ漁の特集番組をやってたな。南洋の小さな島が舞台で、その島には電気もガスも水道もないんだ。凄い暮らしぶりだろう？ その島の住人のトビウオ漁ってのが、やっぱり原始的なんだ。夜間にたいまつを焚いて、その明かりに集まるトビウオをすくうっていう漁法なんだ。昔からずーっと変わらずそのやり方なんだ。なんつー非効率な漁だよ。日本だったら魚群探知機使って網で一網打尽だぜ。でもな、島からその漁を撮る画が神秘的なんだよ。なんでが知らないが胸を打たれるんだ。俺達はやっぱり、古来海より来た者だって説は間違いないのかもしれないなあ」

遠くを眺め語っていた彼だったが、ふと思いついたらしく私に顔を向け尋ねた。

「なあ」

「はい？」

「何の話をしてたんだっけ？」

彼はすぐ迷子になった。その度私は彼を導いてあげた。

「魚の話」

「ああ、そつだ。魚だ。トビウオだ」

彼はぼんと自分の頭を叩いた。

「確かにお前が言うとおりの、夜に跳ねる魚つてのはトビウオに良く似てんだよ。でも違う。トビウオは海の上を跳ねるだろう。でもその魚は、雨の日の夜、アスファルトの上を跳ねるんだ」

また一つ不思議の扉が開いた。彼は得意げな顔をして私の顔を眺めた。腹の立つ顔だ。彼の顔を睨みながら、私は「アスファルトの上を跳ねる魚」と、口の中で何度か呟いてみた。鮮魚を積んだトラックがスリップして引っくり返って、アスファルトの上にぶちまけられた可哀想な魚達がピチピチ跳ねている、などという下らない現実を考えつくより早く、私の頭にそれは浮かんだ。

雨の夜、車が行き交う国道。濡れた路面が突然泥のように溶けだして、幾つもの波紋が走り重なる。アスファルトからは何百というトビウオの群れが顔を出して、銀の鱗を光らせながら走行中の車の脇を飛び跳ねていく。そんな妄想が。

「ありえないありえない」

私は首を振った。

「降参するか」彼はそう尋ねた。勿論私は諸手を挙げて降参した。

まったく、天邪鬼な彼だった。人にニヤニヤしながら降参を薦めておいて、素直に従うとそれがお気に召さないらしい。彼は私から目を逸らし、頬杖を付いて庭を眺めた。与えられた玩具を取り上げられてしまったかのように、とてもつまらなそうに。

「車に乗っていると、思わぬものが見えたりするんだ。種明かしはこうだ。対向車のヘッドライトが濡れた路面を反射する。運転をする俺は、傍らを過ぎていく反射した光を目の端で捉える。するとどうだ。それはまるで跳ね回る魚のように見えたりするわけだ」

彼の目が私を捉えた。口元をゆがめ「下らねえ」と笑った。

「世の中に数ある奇術、その殆どが種明かしされない理由が分かるだろう？ 下らないからだよ。種を明かしてしまうと夢が醒めちゃうんだ。酔っ払っていたなら答えは聞くもんじゃない。例えば俺が、うねり狂う白蛇や、銀河鉄道の夜や、時の回廊を見たと言ったとしても」

「見たんですか」

「見たさ。何れ話してやるよ。今日はもう疲れてしまった」

彼はふいと顔を背けた。

私と彼はよく似ていたと思う。妄想と現実、そのどちらにも属しながら、私達はその境を自由に行き交うことが出来た。上手く付き合っていくことが出来た。妄想が現実を侵すことは決してなかったし（彼は好んでそう見せていたようだが）、現実が妄想を仕打ちするような理不尽さを尽く嫌った。私が彼の愛人になったのは、ある意味必然だったんだろう。それに、私達はとも気分屋だった。言ったことの真逆の行動をとることなんてしばしばあった。この時もそうだった。疲れていたはずの彼は不意に言った。「そういえば俺は魚になったことがあるな」と。

「聞きたい？」

彼はサディストでもあった。にやにや笑う顔が腹立たしかった。

ぐっ、と呻いて、私は言った。

「聞きたい」と。

Rock 'n Roll Suicide

彼女は壁に向って話しかけている。

「ねえ、私を見て。

私は此処に居るわ。

ねえ、私を愛して。

私も愛しているわ。

ねえ、何をしてもいいの。

ねえ、何でもしてあげるわ。

……

……ねえ、

……ねえ、どうして誰も答えてくれないの？」

勿論、答えなんてない。

彼は何時ものように街をうろつく。

肩を窄め、ポケットに両手を突っ込んで。

垂れた頭、長い髪の間隙にぎらついた目が覗く。

その姿はまるで研ぎ澄ませた刃物のようで……。

勿論、誰も彼に触れようとはしない。

そして僕はといえば、

来る日も来る日も飽き足らず

メモ帳に言葉を書き連ねている。

誰にその言葉を宛てるわけでもなく、

託すわけでもなく。

酒と音楽の間で

煙草の煙のように揺れている。

気付けば朝、

メモ帳は真っ白に消されている。

結局のところ

彼も彼女も僕も同じ、

何も変わりはない。

醜く肥大した自己愛に押しつぶされているだけ。

取り返しの無い時を食い潰してゆくだけ。

僕たちは時に痛みを知る必要がある。

互いの心に思いを寄せて、

互いの痛みを心に溶かす必要がある。

けれども僕たちはそうすることが出来ない。

何時も怯えて逃げてばかりで、

差し伸べられていた手に目を背けて……。

バカみたいだ。

僕は気付いてしまった。

君が僕の痛みであったことに。

僕は気付いてしまった。

取り返しようの無い時に。

僕は気付いてしまったんだ。

だから僕はさよならを言おう。

僕は夢見る。

けして届かぬ明日に向って。

僕は王様

夢を見ていた。

夢の中で僕は勇者だった。

伝説の武具を持った、それは美しく勇ましい勇者だった。

剣を払い敵を討ち、魔法を唱え仲間を守り、少し笑んで優しい態度を取れば、次々と素敵な女達が全てをさらけ出してくれる、そんな完璧な勇者様だった。

羨ましいなと僕は思った。

こんな世界でこんな男に生まれたかったよ。夢を見ながら僕はそう嘆いた。

「じゃあ、代わってみるかい？」

夢の中の僕がそう言った。

僕は思わず笑ってしまった。僕が余りに現実知らずだったからだ。だから僕は現実というものを懇切丁寧に教えてやることにした。

「おいおい、冗談はよせよ。お前は知らないからそんなこと言えるんだよ。現実の僕はそりゃ酷いもんなんだぜ？ お前みたいに完璧超人と比べられるのも恥ずかしいくらいだ。なんせ魔法使い寸前のアニメ大好きヒキニートだからな。しかも借金は三百万ほどあってだな、そいつは下り坂を転がる雪だるまみたいにとんどん大きくなる一方なんだ。バカで無策で知恵遅れな政府のお陰で不景気が加速しちまって、両親が会社を首になっちまったんだ。毎日毎日働け五月蠅いんだよ。フィギュアも買わなきゃいけない、特典のついたブルーレイも買わなきゃいけない、新しいゲームだって欲しい。なのに生活の為に借りたお金を回さなきゃならないんだ。ホント最悪だよ。代わってやるだなんて安易に言うな。絶対辞めたほうがい

い

けれど夢の中の僕は首を竦めてこう言った。

「僕は別にそれでも構わないよ」と。

「本気かよ」

と僕は言った。

「ああ」

と僕は頷いた。

僕は僕に指を突きたて予言してやった。

お前は絶対に後悔するぞ、と。

僕は僕に宣言してやった。

もう一度代わってくれと言ったところで、僕は絶対に代わってやるものか、と。

「ああ、構わない」

最後通牒も虚しく、僕はきっぱりとそう言い切った。

こうして僕と僕は入れ代わった。

夢の中というのは本当に快適だ。どんなことも思いのままなのだから。

それがどんな支離滅裂なことだって関係ないんだ。なんせ僕の思うがままなのだから。

ベタに勇者になってハーレムを作るのだっていい。

甘い学生生活を送ったっていい。

たった一人の女に身も心も捧げるふりをしてやったっていい。

猫耳、メイド、幼女、熟女、ツンデレ、ヤンデレ、ツインテールに裸エプロン……。キャラクターメイキングをしてるみたいに、好

きな女のタイプを作り放題だ。

そもそも僕が男である必要もない。なりたいのなら女の子になっただっていい。幾人ものイケメン相手に恋の駆け引きを仕掛けたっていい。気が向けば付き合っつて、気に入らないから手ひどくふっつて、面倒臭くなつたから大蛇振るって血まみれBADエンドで済ませたつて構わない。

そんなのにいい加減飽きたなら、魔王になつて全人類に喧嘩を売つたっていい。どうせ僕に勝てるヤツなんて誰もいないのだから。暴虐の限りを尽くし、血と汗と涙と糞尿に塗れたドス黒い世界を作り上げたつて構わない。誰も僕を咎め正すことが出来る者などないのだから。

ありとあらゆることを僕は夢の中でおこなつた。ストレスなんてこれっぽっちもない。何時でも日々が最高潮だった。

そんなある日のこと、僕はなんとなく僕が気になつて、どんな暮らしぶりをしているのか覗いて見ることにした。

現実の僕は洗面所で歯磨きの真つ最中だった。

寝ぼけ顔の寝巻き姿で、開けた口から歯磨き粉がだらだらと零れていた。

まったく情けない。人に見られたら自殺モノの間抜け面だ。それは差し引いてやるとしても、……随分と老けていた。髪は薄く白いものが混ざり、目元や口元にシワが刻まれていた。

しかも余程苦勞しているのだろう。すっかり痩せてしまっていた。前はもつと恰幅の良い体をしていたのに。今ではすっきりと、逆三角形に体が絞られている。肌の浅黒さからするに、バカでも出来る肉体労働でもやっているんだろうか。

そんな現実の僕は歯磨きを終えて、鏡の前から離れ台所へと向つた。

台所には女が立っていた。見知らぬ女だ。縦ではなく横に広い寸

胴な女。足が大根とはまさにこのことだ。女は下手な鼻歌を歌いながら朝食を作っている。状況から察するに、どうやら僕はこの女と一緒に暮らしているようだ。

「おはよう貴方」

女が振り返った。その顔に、僕は失笑しそうになった。僕が日々組み敷いている女達とは比べるまでもない醜さだったからだ。いやそれどころじゃない。女として生まれてきたことに同情してやりたいくらいだ。そんなレベルの女が聞き捨てならないことを言いやがった。貴方だと？ まさか僕はこんな女と結婚したって言うのか？

おいおい、ホントかよ。家畜と一生を共にするだなんて、僕にそんな趣味はない。

信じられない気持ちかせせら笑いと共に込み上げた。そいつを必死で殺していたら、突然物凄い叫び声が耳を突いた。

僕の視線が足下に向いた。足にしがみつき何かを必死に訴えているガキがいる。

おいおいおいおい、豚に引き続きなんだこの猿は。知性も将来性も見受けられないこの赤猿は。キヤーキヤーキヤーキヤー耳障りな声で笑いやがって。何がそんなに可笑しいってんだ。まさか、こいつが僕の子供だって言うんじゃないだろうな？

僕はいよいよそこら中のた打ち回って、腹がよじれんばかりに笑いたくなった。僕のバカさ加減を並べ立て、そこら中に風潮してやりたくなった。夢から現実へと入れ替わった僕。どうだい？ リアルは生易しくなかっただろう。人に追われ時間に追われ生活に追われ、何一つとして思いのままにならなかっただろう。そうやって人は妥協して生きるようになるんだ。そうやって妥協に妥協を重ねて、そうしてようやく手に入れられる幸せは、そんな華のない家族だ。一度でも思わなかったことはあるか？ 帰りたいと。

「だれが代わってやるものか」

笑わせる。本当に笑わせてくれる。

けれど僕はもう笑いを堪えなくなつた。

何故か笑えなくなつていたからだ。

現実にいる僕は妻と子供と和やかに朝食を取っている。トーストとハムエッグとサラダとコーヒ―。子供には牛乳を。取つてつけたみたいな朝食だ。そういえば父と母の姿が見えない。家の間取りも違う。実家を離れて何処か程度の良い借家にも越したのだろうか。手狭だけど朝の光がいつぱいに差し込む居間は、なんだか新鮮に写つて見える。

「羨ましい」

僕の口からそんな言葉が零れていた。

真つ暗な夢の中で僕は考えていた。

どうしてあんな言葉が口についたのだろう。何が羨ましいというのだろう。わけが分からない。僕は望みの世界で生きている。ありとあらゆる願望が適う世界で生きている。障害と妥協だらけのアイツがいる世界とは真逆の世界だ。なのに何が羨ましい？　なのに何がこんなに妬ましい？

答えが出ない。その癖この気持ちは大きくなる一方だ。

堪らなくなつて僕は僕に会うことにした。

お前が羨ましいと、また向こうに戻りたいと、僕は僕に訴えた。

すると僕は首を振った。「出来ない」と、痛ましそうに首を振つた。

僕は怒りに震え叫んだ。

「どうしてだよ。僕は本当は現実にいる僕だぞ。僕がもといた世界に返りたいと言つてなにが悪いんだ！」

僕は静かに答えた。

「じゃあ君は知っているのか？　父さんと母さんが亡くなったことを。痴呆症になって、寝たきりになって、そうして病院のベッドで死んでいった二人のことを。じゃあ君は覚えているのか。君が僕と

入れ替わるまで暮らしていたあの家を。今ではあの家は取り壊されて、大きなマンションが建っているよ。

あるいは君と僕だけの関係ならば、また交代したって構わなかった。けれど今の僕には妻がいる。子供がいる。友人がいる。勤め先がある。君の知らないたくさんの思い出がある。君が背負わず逃げ出した現実を僕が肩代わりしている間に、僕はもう僕だけのものじゃなくなってしまったんだよ」

もう二度と君には会わない。

ヤツはそう言い、僕の前から消えてしまった。

夢を見ていた。

たくさんの夢だ。描けばどんな荒唐無稽も適う夢だ。素晴らしいと思っていた。この僕だったら、どんな夢も思い描けると思っていた。

けれど今の僕には、雲の無い真っ青な空と、見渡す限りの砂山と、玉座。それしか浮かばない。

『僕はもう僕だけのものじゃない』

ヤツはそう言っていた。なるほど。お前が気付いて僕が築けなかったものがこの差なのか。

空虚な世界、僕は独り玉座から見渡す。

僕は王様。

からっぽの王様。

月になりたい

小さな頃から私は太陽になりたいと思っていた。
明るく、朗らかで、無邪気で、人気者で。

そんな誰もの太陽になりたかった。

けれど実際の私はその逆。

世の中の端っこで、きらびやかな世界をモノほしそうに指を啜えて眺めている、そんな陰気な生き方しか出来なかった。

憧れとは適わないからこそその憧れなんだと思う。

理想と現実のギャップを受け入れ、でも全ては受け入れられなくて、歪な自分をシニカルに笑いながら、そうやってなけなしのプライドを守ってきた。

それが少し変わったのはつい先日のことだ。

その日、彼は酷く調子が悪そうだった。

湯気の立つ器を前にただ見詰めるだけで、一向に箸に手を伸ばさずとしなかった。

せつかく作ったうどんはぐだぐだにのびるばかりで、勿体無いなあ、なんてことを私は呑気に思っていた。

不意に彼は言った。

「やらなきゃいけないことがあるって分かっている。動かなきゃいけないって分かっている。でもやる気がおきない。何をしたいのか分からない。何がなんだか分からない。もう何もかもがイヤだ」

彼は萎んだ声で涙ぐみながらそう言った。

心の風邪を拗らせて、すっかり自信を無くしてしまった彼。そんな彼に、案の定陰気な私は気の利いたことひとつも言ってもやれなかった。

伝えたいことが山ほどある。

願っても適わないことがある。

代わってやりたいと思っても背負えないことがある。

泣いたって救えないことがある。

私はその時初めて思った。

飽きる程に傍にいる、彼の月になりたい。

初めてそう思えた。

終焉

君に会えてよかった。

と君は言った。

十に重なる声、ひび割れて、

天上に喘ぐように僕はさめざめと泣いている。

何を思うことはなく、

何を嘆くことはなく、

君は空を仰いでいる。

ふらふらと振るえ、

僕は君を仰いでいる。

何を通す？

何も通さない。

歴史は僕を裏切り者と呼ぶだろう。

けれど、

僕は知っている。

君も知っている。

それでいい。

それだけで十分だ。

処刑は始まる。

突き刺す槍の行方を見詰める。

さようなら、僕の愛しい人。

愛された者？

馬鹿を言うな。

誰に認められなくともいい。

君さえ僕を知るのならば。

0と1の間

身を切るような寒空に雪がちらついていた。

此処ではない何処かへ。プラットホームにごったがえす人たちは、すっかり身をちぢ込ませて迷惑そうに空を睨んでいる。

遠方でけたたましい音があった。

大戦中、最後までこの街を戦火から守り通した、高く分厚い石壁。それをアーチ型にくり貫いたトンネルから、もうもうと煙と上げ大陸横断列車が姿を現した。

誰が言い出したのだろう。私が住むこの街は「出会いと別れの街」なんて言われている。大陸の中央にある交通の要所で、様々な人が混じり合うからそう呼ばれるのだ。ロマンチックでちょっと切なくて、素敵な響きのある愛称だと思っていたけれど、今日ほどそれを憎らしく思うことはなかった。

「時間だな」

ざわめくプラットホームの様子を見て、彼が立ち上がった。引きずられるように私も立ち上がる。

別れの時が近付いていた。

何か言わなきゃいけない、そう分かっていた。けれど寒さに身が縮こまるように、さっきから言葉が口をつかない。そうこうしているうちに列車がホームに滑り込んでくる。

入れ違う人々。人ごみに流されないように彼が私の肩を抱く。

急に涙が零れた。

「行かないで」

ああ、なんてことを私は口にしてるんだろう。それだけは言うまじと思っていたのに。女々しい。こんな涙だけは零すまいと思っていたのに……。

けれど涙は止まらなかった。後から後から止め処なく流れてくる。「ごめんね、ごめんね」と、そんな言葉ばかりが出てくる。違う。

私は彼を困らせる為に此処に来たんじゃない。

「……今この時も考えてしまっただ」

大きな手の平が優しく私の頬を覆った。見上げると彼が微笑んでいた。

「この街で気の置けない奴等と楽しくやっていけばいいじゃないかって。この街でお前と一緒に暮らしていけたらどんなに幸せだろうって。でもそれじゃ足りないんだ」

わがままでゴメンな。

口づけを残して、彼はこの街を去っていった。

春。

一年が過ぎた。

彼からの便りが届いた。

近況を綴った手紙はなく、代わりに彼の街までの切符が入っていた。

住み慣れたこの街を出て、見知らぬ土地で新しい何を始め始めるのもいいかもしれない。

庭先の舞い散る桜を眺めながら、私はそんなことばかり考えていた。

よつこそ、この呪われた世界へ

僕の思いが叶ったのは、八度目の彼女へのコール、その後だった。口説くような蔑むような愛でるような甚振るような、天使と悪魔を織り交ぜた熱烈な交渉の末、彼女から条件を切り出させた。目を改めて古臭く安っぽいホテルを敢えて選んだ。ただ行為だけが目的のような、薄暗く湿った汚い部屋を。別に金がなかったわけじゃない。その方が彼女に似合うと思ったからだ。

時間通りに部屋へやって来た彼女は、ベッドの端にぴんと背筋を正し腰掛けた。タイトスカートから突き出た素足が妙に艶かしかった。身に着ける小物一つ取っても趣味が良く、着飾る何もかもがシツクに鮮麗されていた。ウェーブのかかった豊かな栗色の長い髪、その合間から覗く彼女の横顔は美しく、素っ気無い程の無表情で、喪中の未亡人のような風いだ静けさの中に身を潜めているようだった。

そんな彼女を僕は少し離れたソファから感心して眺めていた。流石に男をよく知っている。装うは美しい清廉な淑女。しかしその裏側を表すような毒々しい程の赤い唇。

あれを思う存分汚してやりたい。
そんな劣情に駆り立てられるように、僕はボイスレコーダーをテーブルに置き、彼女に質問を始めた。

まずは当時の街の様子について教えてください。

そうですね、重苦しい……。街全体がそんな感じでした。

賑やかなイルミネーションは夜を彩るけれど、人足は鈍くて、通りを歩く誰もが寒そうに背中を丸めていました。

商売の方にも影響が？

私がこの仕事を始めた時にはもう不景気で、それが当たり前だったから。でも話では聞いてました。「バブルの時から比べれば皆考えられないほどケチだ」って。確かに金払いのいい人は中々お目にかかれませんでした。みんなお金を出し渋って、その癖無茶な要求ばかりしてきて。よく困ったものです。

仕事の愚痴、家族の愚痴、恋人の愚痴、色々と聞きかされました。私の胸の中で子供のように泣いた男の人もいました。

みんな何処か気だるくて遣る瀬無くて、行く当ても帰る場所もなくて……。

それは確かに重苦しい（苦笑）。

でしょう。自分までもそんな風に染まってしまっようで。

だから私はお金を派手にばら撒いていたの。街角に立つ歳を食った女の人達に嫌味つたらしく。見せびらかすように。

怖かったんです。

あれは何時かの私の姿なんじゃないのか、そう思えて。

ホテルについての話を聞かせてください。何でもいい。例えば、噂とか、実際行ってみての感想とか。

建設途中からもう評判は立っていましたよ。周りからも「是非行

つてみたい」「誰か呼んでくれないかしら」「そんな声で持ちきりでした。確かにとても綺麗な外観でしたね。真っ白い、流線型の宇宙船みたいで。内装の方も凄くて、二層吹き抜けのエントランスには豪華なシャンデリアが吊るされていました。三階までは商業施設が入っていて賑やかなんですが、四階のホテルからは、もうまるで別世界。とても静かで、重厚で、パブリックな雰囲気があつて……。

でも、私は毎週のようにそのホテルに呼ばれていたんですけれど、周りの子らが羨ましがるのが他所に、行きたくないなって、本当はそう思っていました。

それは何故？

だって、気が引けちゃうもの。私なんか此処に来てもいいのかな、って。

……それに、私はとことん嫌われていたから。

嫌われる？ ホテルマンに？

いいえ、従業員の方たちはとても親切でした。みんなしっかり教育が行き届いて気持ちのいいくらい。でも何故かとても居心地が悪いの。

私を嫌っていたのはホテルそのもの。

あれは恐らく人を選ぶホテルだった。どういう基準で選んでいるのかは知らないけれど、好ましくない者には恐ろしく余所余所しく冷たい。あの建物はそんな建物だったんです。

だから遠まわしに頼んでいたくらい。

「毎週こんな凄いホテルに呼んでくれるのは嬉しいけれど、お金掛

かるでしょう。もっと安いホテルで十分だよ」
なんて。

では、あの時も貴方は、仕事で呼ばれてホテルに居たんす
ね？

ええ。何時も私を指名してくれるお客様に呼ばれていました。

……つまらない人でした。

大らかで、風みたいな気持ちの良い人でした。

丁寧に丁寧に私を愛撫してくれました。まるで恋人でも扱うみた
いに。

事を済ませて私は一人でシャワーを浴びていました。お客様も一
緒に入りたがりでしたが、私はそれをお断りしました。時間が迫っ
ていましたから。そのお客様の後、同じホテルの最上階にあった大
フロアに呼ばれていたんです。当時働いていた事務所の女の子たち
を丸ごと貸しきる程の上客で、遅れるわけにはいきませんでした。

身だしなみを整え、テーブルの上のお金を仕舞い、私はお客様に
「またね」と愛想を振って部屋から出ようと思いました。すると突然、
後ろから抱きすくめられました。「辞めてしまえ」って。

大きなごつごつとした手だった。働き者の手。父の手にそっくり
だった。

あいつが呼ぶには過ぎたホテルだった。何か私にもつと言いたい
ことがあったんじゃないのか、そう思う。でもあいつは何も言わな
かった。私も聞きたくなかった。だから私はその手をそつと退けて、
振り返り唇を重ねた。笑って、そして何も言わずに部屋を出た。

つくづく嫌になっていた。毛足の長い赤い絨毯の上を歩きながら、
私は青臭い思いで胸を一杯にしていた。とうに捨ててしまった思い
が溢れかえって、息が詰まりそうだった。エレベーターに乗って、
私は向わなければいけない最上階とは逆のボタンを押していた。そ

してがらんとしたロビーラウンジで一人、高い割には大して美味しくないコーヒーを両手に抱え啜ったの。

中断しよう。

……ゴメンなさい。大丈夫です。

時間は夜の十時を少し廻っていました。不味い不味いと思いながら、何度も時計を見ていたから間違いありません。携帯には何の連絡もなく、ああ、私は首なんだな、そう思いました。

コーヒー代の会計を済ませて、私はホテルを出ようと思いました。そこで、あの音を聞きました。

音

ええ。ガラスが粉々に砕け散るような音でした。その途端、ホテル全体が大きく揺れて、はっとして私は身を屈めました。揺れはすぐに収まったけれど、私は暫くそうしていました。余震がくるかもしれない、そう思いましたから。

ボーイがすぐに駆け寄ってきて、ソファに私を座らせてくれました。そしてホテルの奥へと駆けて行きました。続いてフロントマンも。いよいよ私はロビーに独りぼっちになってしまつて、不安と寂しさでさめざめと泣いてしまいました。でも泣きながら、私は奇怪しいと思っていたんです。

何故逆なのだろうと。

地震の後であの音がしたのなら分かります。でも逆だった。音と地震はまるで関係がないのかもしれない。でも私にはあの音が全ての始まりだったんじゃないのか、十年経った今、そう思えてならないんです。

恐らく地震から10分と経っていなかったでしょう。私にとっては永遠無限のような時間でした。誰でもいい。早く誰かに来て欲しい。一人は余りに心細く、私は震えていました。そんな私の耳にまた音が届きました。

悲鳴です。

一方的で、残忍で、血の臭いが似合う、なのに蜂蜜に果実を浸したような甘美ささへ纏う、そんな悲鳴が。

それは高く遠くから、段々と私の下へと近付いてきていました。私は体を起こし、震える足を一步踏み出していました。外ではなく、中へ。

芯が熱く燃えて、狂おしい程でした。そこに行ってしまったら決して戻ってこれない。私はそう理解していました。蝕まれ、引きちぎられ、砕かれ、喰い散らかされ、ありとあらゆる苦痛の果てに、私は魂さへ残さず飲み込まれてしまっただろうって。でも、それでも私はそこへ飲み込まれてしまいたかった。どんなに凄いセックスを束ねても叶わない快樂の渦、そこに足を踏み入れてしまいたかった……。

なのに貴女は此処にいる。

あの人が邪魔をした。

私の腕を掴んで、外へ強引に連れ出したの。本当だったら私もあそこで……

とても残念そうだ。

笑

結局のところ、貴方はあのホテルで一体何が起こったと思う？

分からない。けれど馬鹿げた事を思うの。パーティー好きのラリった宇宙人が遊びに来たんじゃなかった。ただその人達の遊び方がちよつと派手で、地球人と会わなかったってだけ、なんて。人を犯し引き裂きすり潰して、ホテル丸ごと一つ燃やして、そうやってしか遊べない奴らだったんじゃないのか、って。

私はパーティーに乗り遅れてしまったわけね。

「もういいでしょう」

彼女はそう言った。僕はボイスレコーダーのスイッチを切って、最後にもう一つだけいいかと尋ねた。

『君はこれからも狂った女神のように、こんな仕事を続けていくのか？』

彼女は唇の端を吊り上げた。そして僕に見せ付けるように赤い唇を舌なめずりして言った。

続ける、と。

それから僕は彼女との約束を果たした。望み通り、彼女を一晚中玩具のようにボ口雑巾のように扱ってやった。

僕は思う。

またもう一度、あの時味わい損ねた快樂を探して、彼女は自分を

汚し続けるだろう。そうして手に入れた金で、彼女はその美しさを保ち続ける為に惜しみなく努力を払い続けるだろう。

乱れし妖しの花。

恐らく彼女は彼女にとっての祝福の地に辿り着けない。そうであるが故に、彼女は永遠の人となりえるかもしれない。

その御老体は僕を一目見るなり、張りのない、だがはつきりとした口調でこう言った。

「俺はお前みたいな外道を息子にも孫にもした覚えはねえ」と。

つい先日ICUから移ってきたばかりだという御老体は、見るも無残な痛々しさだった。真っ白な糊の効いたベッドの上に体を横たえ、枯れた枝のような細い体のあちこちに管が幾本も刺さっていた。肌の色は浅黒くまるで潤いと呼べるものはない。肉も脂肪も削ぎ落ちた体にまざまざと浮き上がった骨格。すぐ側に迫る死の色は濃く深く、ありありと見て取ることができた。

僕はまず自分の名前を名乗ると、生き別れになった息子と偽り、面会謝絶の御老体に近付いた非礼を詫びた。それから、御老体を今日まで探してきた事、御老体の仲間達のご好意とご尽力があったから此処まで訪れることが出来たという事、十年前ホテルで起こった火災事件の真相を調べている事、勿論話をしてくれたのなら出来る限りの礼は尽くす事。それらのことをなるべく手短かに伝えた。

瘦せ窪んだ奥の、やたら空虚な目でじっと僕を捉え、御老体は言った。

「お前も酔狂な奴だな」

僕はまるで精気のない、けれど吸い込まれてしまいそうな程に何処までも澄み切った目に芯底ぞつとした。怒りもなく、悲しみもなく、興味さえもなく、ただ純粹に生命の炎が潰えるのを眺め続ける。死神とはもしやそんな存在で、そしてこんな目をしているのではないのか、そう思えたのだ。

御老体はそれ以上何も言わなかった。僕はそれをOKのサインと受け取って、ボイスレコーダーを枕元にセットした。

あの街には随分長く居ついておられたようですが。

四十年か、五十年か、まあそんなところか。細かい年月は忘れちまっただな。

ではあの場所にホテルが建つことになった経緯はご存知でしょうか。

そもそもあのホテルは駅東地区の再開発計画、その要として建てられたものだった。単なる商業施設や宿泊施設としてだけではなく、地下鉄駅のエントランスとしての計画も盛り込まれていた。将来的にはあのホテル周辺は、郊外へと流れていった人を呼び戻す為の起爆剤となる予定だった。まあ、燃えちまって計画は大幅な変更を余儀なくされたがな。それくらいのことはお前だって調べがっているだろう。

それだけ大規模な開発ならば表沙汰に出来ないようなこともあつたのでは？

さてどうかね。

例えばあの当時……、

土地を転がし、株さえ買ってりゃ馬鹿でも儲けられた、そんな狂った神話の中だ。

その当時この街はな、大臣にまで成り上がった有力な代議士によって表も裏も仕切られていた。だがバブルが崩壊した数年後、その代議士は首を吊って死んだ。変わりに新しい代議士になったのは、東地区の再開発計画を推し進めた市長だった。亡き代議士の意味を引き継ぐと称してな。

お前はこれをどう捉える？

単なる偶然だと思いたくないのだろう。

天上から垂れ下がる一本の糸のように、お前が求める事件へと繋がっている、そう思いたいのだろう。

お前はお前にとって都合の良い真実を築きたいだけじゃないのか。宛らあの塔のように。

塔？

ホテルのことだ。

美しかった。

染み一つ無い、白く冷たい陶磁器で出来た女。見上げる度にそう思っていた。

あの夜もそうだった。いや、それ以上だった。

見上げると青白く輝いていた。大きな月にさえ届く塔のようにな。怖かったよ。純真無垢、それと相反する禍々しさ、二つを兼ね備えていた。

あの寂れ荒みきった汚泥のような街に、唯一人輝きを放つ孤高の存在。とてもこの世に在っていい物とは思えなかった。

その塔で、あの夜、貴方は何を見たんですか。

コックの見習いにな、中々の変わり者の小僧がいた。

この俺を田舎の爺と重ね合わせて何かと良くしてくれた。

このホテルで一人前になったら本場で修業して一流のコックになるんだ、そう未来に目を輝かせていた。

その日、小僧は俺を裏口からホテルへと招いてな、誰も居ない調理場で手料理を振舞ってくれた。こう見えても俺は結構舌が肥えている。有名店の残飯を粗方漁り尽くしたからな。小僧の料理はまあ……、まだこれから、と言った所だった。それでも嬉しかったよ。俺は文句を言わず残さず食べた。

時間は一時を廻っていただろうか。

始まりは臭いだ。

獣……。すえた獣の臭い。俺も風呂に入らないから酷いもんだが、そんなもんじゃなかったな。流し台に首突っ込んで吐いたよ。とても耐えられたもんじゃなかった。吐きながら思ったよ。違う、この臭いは覚えがあるってな。

それはどんな？

南洋にはな、俺の沢山の同胞が眠っているんだ。

あの戦いで俺は地獄を見た。食う物もなく飲める水もなく、誰より勇ましかった奴らが戦うことも出来ず死んでいった。腐る肉の臭いを嫌というほど鼻にした。思い出したよ。時間も場所も違うあのホテルで、俺はあの時の臭いを確かに嗅いだ。

臭いと記憶にやられ、俺は胃の中のものを残らずぶちまけていた。その間中、懸命に小僧は俺の背中を摩っていた。どうしてこいつは平然としていられるんだ？ 戻すものもなく、やがて痙攣しはじめた胃の痛みに身悶えしながら、俺はそれを不思議に思っていた。

そのうち小僧は誰かを呼んでくると調理場を飛び出していった。よせと俺は止めようとした。だが声にならなかった。

しばらくして、小僧の絶叫が聞こえた。

そして恐ろしい程の静寂が訪れた。

するとだ。その静寂の中から音が聞こえ始めたんだ。

ざっ、ざっ、と。規則正しい響きだ。軍靴の音だ。ちやりちやりと鳴る銃創の音だ。

奴らだ。奴らが帰ってきたんだ。おめおめと一人生き残った俺を迎えにきやがったんだ。

俺は地べたを這いずり、ダストシユートに飛び込んだ。

ゴミに塗れて奴らから逃げ出したんだ……。

(沈黙)

それが……、貴方の言う真実なのですか

皮肉か？ それともお前はバカなのか？

いいか、言葉は正確に扱え。俺が語るのは俺が見たもの聞いたものだけだ。つまり事実だ。俺の事実だ。お前のつまらん推測と検証に付き合う程俺は物好きじゃねえ。ましてそんな時間なんざ残されてねえんだ。

俺はな、物好きで世捨て人なんぞやってる分けじゃねえ。この世の中のありとあらゆるものが俺を嫌うんだ。だから俺も嫌いになつてやった。

あの戦争の後、俺達に残されていたものはなんだったと思う？
屈辱だ。

それでも懸命に働いた事もあった。瓦礫の山からの復興、三国人らとの闘争、今度はそいつに命を捧げた。若い奴らに次を託す為に敢えて口を噤んだ。その結果がどうだ。若い奴らは俺達を責めた。そうやって都合の悪い事から目を反らし封じた。

この国は豊かになっただと？ 馬鹿を言え。尊厳を売り払う者ど

もで溢れかえってるこの国がか。義務も果たさず権利ばかりを主張する、自由の意味を履き違えた愚かなガキどもで溢れかえってるこの国がか。

だから俺は義務も権利も捨てた。そんな奴らに一円たりとも身銭を落とすたくねえ。俺が知ってるやもしれん真実も口にすたくねえ。こうして寝床の上で死んでいくのさえ屈辱的だ。

お前らも精々もがき苦しめ。

そして緩慢に滅んでゆけ。

御老体の目に火が灯った。

それは朽ちる前のほんの僅かなひと時の、一際燃え盛る炎に似ていた。

それを証に、御老体は萎むように咳づいた。酷く悶え苦しみがら。

僕は慌ててナースコールに手を伸ばした。

その手を御老体は掴んだ。

「俺はな、今、棺桶に片足突っ込んでるから、この世にあって見えちゃならねえものが見えるんだ。

お前、重たくねえのか。

一体何をしたらそんだけのものを背負い込めるんだ。

覚悟しておけ。お前、決断していい死に方はできねえぞ」

命を賭すような、残りカス程の力の全てを搾り出すような声だった。

それがただただ恐ろしく、僕は老人の手を振り払い、夢中で病室

を飛び出していた。

月下遊泳

覗き込んだレンズの先に星を見つけたの
瑪瑙のような艶やかな星よ

それは淡い色を滲ませて、ずっと彼方へと私を運ぼうとするの
まるで昔からの友人のように、
ファンダンゴみたいな軽いステップを踏んで

私は星につれられて、

空に身を浮べる

浮べた空は途方もなくて、

雄大で、

私の居場所までも飲み込んでゆく

小さな囁きも逃げ場所を探すわ

耳から耳へ輪を描くノイズに耐え切れなくなったら、

私は会った事もない神様に悪態を並べて、

声と気配を殺して部屋へと逃げ込むの

月影が伸びる部屋に何時も独り、

私はシーツに包まる

目を閉じて旅をするの

百億の距離と時間を越え、貴方を追い求めて

光はもうずっと後ろで、

とっくに息を切らしている

けれどもいつまでたっても、私は貴方の背中さえ拝めやしない

もし貴方が、琥珀色した飲み物に氷を浮べて丸い溜息を吐きたい時
は、どうか私を思い出して

ささやかと言うにはおこがましいけれど、それだけが私の願い。

コードが群がった部屋に君は住んでる。

君が怒るから言わないけれど、

宝物のように扱うそれは、僕にはただのゴミにしか見えない。

そんなゴミまみれの部屋で君は言う。

「現実は何処だと」

なんて馬鹿げたセリフなんだ。

濁らない画面を見つめながら、賢しげなことを言わないで。

知った風なことを言わないで。

少しは僕を気にしてほしい。

君の頬に手を触れる。

君は暖かくて柔らかい。

君はとても綺麗だよ。

僕の言葉は届いてる？

目を閉じて、寝たふりをしないで。

興味の無い話を永遠と聞かされる。それは十分に拷問と呼べるものだ。

テーブルの向いに座る女がトウトウと語りかける。神の存在、そしてとある男が体験した奇跡の物語を。

なんでもその男はアフリカへ旅行中、広大なサバンナの只中で突然の異常気象に襲われたのだそうだ。湧き上がる黒雲。振り落ちる無数の雷。雷は火を呼び、男は業火に囲まれてしまった。

そんな危機的な状況を、金色の目を持った白蛇が救った。男が業火の中から無事潜り抜けられるよう、蛇が導いてくれたと言うのだ。以来男は、その蛇を神と崇める教団を作った。その男こそが女の横に座る、猿のような小男である。

勿論彼女が語る戯言を信じる気になれなかつた。それでも僕は熱心に耳を傾けるふりをした。何故ならその時の僕の肩書きは『有名な大手出版社のルポライター』だったからである。そうでもしなければ、この小男と顔を合わすことさえ出来なかつたのだ。

なんとか氏と二人きりになれないものだろうか。女の声が響き渡る応接室の中、僕は考えを巡らしていた。目的はただ一人、この教祖という仮面を被った詐欺師だった。しかしこれがなかなか難しい。このあつぼつたい目をした女も厄介だったが、もう一人、氏の隣に座る男が最大の障壁だった。

その男は、蛇や蜥蜴のように、まるで感情の見えない目で僕を睨みつけていた。まとう空気は普通ではなかった。明らかに暴力の臭いがした。今やこの教団は、財政界や闇社会にまで深い関わりを持つと噂される巨大組織である。当然ながらこのような男も必要となってくるのだらう。

僕は賭けに出ることにした。

僕は彼女の話を手を挙げ遮ると、テーブルの上のボイスレコーダ

を、これ見よがしにスイッチを切ってみせた。そしてじつと氏を見詰めた。僕の口からはある一人の男の名が零れる。

さん。

氏の顔色は明らかに変わった。柔和にシワが寄る目が猜疑で細く鋭くなる。僕は黙ってその目を見詰め返した。

只ならぬ気配は、つぶさに隣の男へと伝わったようだった。男は静かに立ち上がった。声ひとつ出さず、もの凄い力で僕の胸倉を掴む。無理やりソファから引きずり立たせられた。

しくじったか。

僕は手痛く追い出されるのを覚悟した。

しかし氏は、男を制した。

「辞めなさい。この人と二人だけで話しがある」

どうやら賭けに勝ったらしい。ふっ、と僕は息を漏らした。

……だが、そう思ったのは大きな間違いだったのだ。

やっと二人きりになりましたね。

よ。
気持ち悪いな。それはまるで恋焦がれた女を口説くような台詞だ

はは、そうですね。ですが正にその通りでして……。

ここ数ヶ月、僕は貴方のことしか頭になかったんですよ。インタビュアーにとつて対象者とは狂おしいほど愛しい人と同じになつてしまうのですね。何もかも知つておかなければ気がすまない。

失礼ですけど、貴方のことを随分色々調べさせてもらいました。

……ほう、例えば？

例えば、かつては名の知れた建築士が、今では新興宗教の教祖様をやっている、だとか。

……なんのことだと惚けるのは簡単だがね。なるほど、と言つておこつか。

それでは仮に、君の言う『貴方』が私だったとしてだ。君は何を目的として私に近付いたんだ？ 金かい？

単刀直入ですね。でも僕はそんなもの望んじやいませんよ。

信じられませんか？ もし僕の目的が金だとしたら、わざわざ此処に来ちやいませんよ。代役を立てるなりして直接貴方と顔を合わせたりはしないでしよう。それにね、そもそも僕は貴方を脅しにきたんじゃない。取り引きにきたんです。

取り引き！ 君の持ちかけるそれはとても怖そうだな。しかし興味も惹かれる。では尋ねるが、君は一体私に何を引き取ってもらいたいって言うんだね。

コイツです。

……

……どうです？ なかなかのレポートでしょう。貴方がまだ大学生だった頃、海外留学先で起こしてしまった犯罪についての詳細は名目上は廃墟への不法侵入罪。しかしその実、貴方がやるうとしていたことはイカしてる。

貴方はその当時、とあるカルト教団に随分と嵌っていたようですね。

廃墟には祭壇が生まれ、薬で虚ろな女性が一人いた。

恐らく貴方がしようとしていたこと、それは女を生贄に捧げること。

つまり、あなたは人を殺そうとしていたんだ。

……なるほど。これはこれは、とてもとてもショッキングなレポートだね。これが君の手によって記事にされでもしたら、真偽は別にしてもとても不味いことになりそうだ。

……ああ、とても危険だ。

ここで君には消えてもらおうとしようかな。

……ふふ、冗談だよ。

で、私はこれを表沙汰にさせない為に、一体君に何を差し出せばいいと言っただい？

十年前、貴方があのホテルで体験したことの全て。

……驚いた。本当に凄いな君は。何処でそれを掴んだんだい？なるほど。確かに『君の言う僕の過去』を穿り返すだけの価値はある。けれどね、君は大きな間違いを犯しているよ。その自信に満ち溢れた顔から察するが、どやらまるでそのことに気付いていないようだ。

残念だがね、この取り引きは成立しないよ。

何故ですか？ これは貴方にとって致命的な話ではありませんか。

そうでもないんだよ。何故ならね、僕はもう既にこの世にはいないんだ。

はっ？

君は優秀だ。僕の過去を調べ、もつとも致命的となる点を深く深く掘り下げた。その嗅覚と調査能力、そして此処まで乗り込んでくるその度胸、本当に素晴らしい。しかし、それにはかり目をやりすぎた。君はもつとも根本的なものを見落としてしまった。

君、僕の戸籍は調べたかい？

調べてないだろう。だったらすぐに取り引き材料にならないと気付いてるはずだ。

……僕はね、戸籍上、もう死んでいるんだよ。

まさか！

調べてごらん。あの日あの時あのホテルで、君の言う僕は焼け死んでしまっているのさ。既に死亡届が出されて処理もされている。君が口にしたその男は、もうこの世にはいないんだ。たとえどれほど証拠を揃えようとも、この事実が覆らないかぎり、誰も動きはしない。

いや、覆ろうとも、誰も動かない。

それはどういう意味ですか？

君は本当にマスコミに携わる人間なのかな？ 恐らく違うな。まあ、そんなことはもうどうでもいいがね。

ホテルの火災事件を色々調べているようだが、だったら既に気付いているだろう。異様なほどの情報の少なさを。被害者が数百名にもものぼる、街の顔となった複合ホテルの炎上事件。事は歴史に残る大惨事だ。にも関わらず、どのマスコミもまるで触れようとしていない。触れられない、触れることの出来ない理由があるからだよ。

まあ、僕が口に出るのは此処までだ。

ゲームEND。残念ながらね。

「そうだ君。君も誰かに崇められる立場になりたくないか」

氏はそう僕に尋ねた。

話は打ち切られてしまった。もっともっと上手くやれば、まだ情報を搾り取れたろうに。僕はその後悔で頭がいっぱいだった。だから返事も御座なりのいい加減なものだった。

「そうかい。じゃあ教えてあげるよ」

氏は柔和な笑みを頬に浮かべていた。しかしそれに反して、目は冷え冷えとしたものだった。

「大抵の人間は、自分の上に誰かがいて欲しいと願っている。誰かが導いてくれるのは楽でいいし、それに何かがあった時、荷を背負うのはまっぴらゴメンだからだ。しかしだからと言って、自分が最下層の人間になるのも絶対に嫌がる。そして必死に自分より下の人間を見つけようとするんだ。」

ネットを見てごらん。誹謗中傷のオンパレードだ。目に見えない相手だから、どんなに卑下し馬鹿にしても大した罪悪感を抱えないでいられる。例えばそれが人を追い詰め自殺へと追いやってしまおう

とも、そんなのは何処か遠い国のお話だ。知ったこつちやない。それより必死さ。自分より下の人間を作ること。自分はまだ大丈夫だ、そう安心を得る為に。

人間はね、物差しが欲しいんだ。何も無い自由では自分という価値を計れない。だから不自由の中に価値を見い出そうとする。そしてその価値を信じたいと願う。……ようは騙されたいのさ。

だったらつけこんでやればいい。騙してやればいい。ほんの少し弄ってやるだけで、人は容易く自分を見失える。見失わせてしまえば、あとは……」

にやつく顔。反吐が出る。しかし真実を穿っている、それは間違いなかった。人の弱さを、浅ましさを、この男はよく知っていた。なるほど、人を食い物にするとはこういうことなのか……。

しかしながら、分からないことがあった。

どうしてこの男は僕にそんなことを教えてくれるのだろうか？

氏はまるで僕の心を読んだようだった。

「君と僕とはね、とてもよく似ているよ」

その一言でカツと頭にきてしまった。僕は怒鳴るように反論していた。

「無礼を承知で言わせてもらいますがね、僕はなんの恨みもない人を騙してまでも全てを奪い取るうだなんて、そんな下衆なこと一度として思ったことありませんよ！」

氏は意味ありげな笑みを浮かべた。そして「それ……」と、僕の胸ポケットに引っ掛けられた万年筆を指差した。

「随分と多機能な万年筆みたいだね」

自分でも分かるほど、血の気が引いた。

氏は完全に僕の考えていたことを見通していた。だからこそこんな一言を添えたのだらう。

「人を騙してでも目的を達成させる。君と僕の何が違う？ 間違いない。君と僕とは同じものだよ」

異世界には不足

彼には忘れられない思い出があった。

幼馴染の少女との思い出だ。

彼女は何時も傍にいた。傍にいて、笑いあったり喧嘩したり泣きあったりしていた。

例え喧嘩したって、次の日にはお互い忘れて遊び合える、そんな仲だった。

彼にとって彼女はとても大切な人だった。

なぜだろう。そうと気付くのは、何時だって失ってからだ。

彼が最後に彼女を見たのは九年前。六歳の時だ。

小山の中腹に立つ小さな神社が二人の遊び場だった。

その日、かくれんぼをしようと彼女は言った。

わがままな彼女で、何時も決まって最初の鬼は彼の役目だった。

十を数えて叫ぶ。

「もういいかい」

「まだだよ」

「もういいかい」

「まだだよ」

「もういいかい」

「まだだよ」

「もういいかい」

……返事が無い。

「もういいかい」

やっぱり返事がない。

石造りの鳥居。小さな社殿。枝を高く伸ばし、葉を繁らせる大きなご神木。

差し込む木漏れ日が暑い、夏を間近に迎えたそんな日だった。

何故だろう。妙な胸騒ぎを感じた。

噴出す汗を拭いながら、彼は必死に彼女を探し始めた。

境内にはいない。社殿には隠れるような広さはない。

じゃあ裏山に行ったのだろうか。道なき道を登っていく。

そうして彼は彼女を見つけた。

醜い瘤が目立つ「お化けの木」。

そう怖がって、決して近づこうとしなかった巨木の前に、彼女はいた。

しかし何か様子がおかしい。

彼女は誰かと話しをしているようだ。

とても親しげに、嬉しそうに、その目は爛々と輝いている。

木の陰に隠れて、それが誰かは分からない。

誰だろう？ 彼は彼女に近づく。

すると、やたらはつきりと、彼女の声が入ってきた。

「うん。やる」

頷く彼女。その前に、ぬっと真白いものが伸びた手だ。白く光る手。

気味の悪さに思わず足すくむ彼。

それとは逆に、喜んでその手を取ろうとする彼女。

「だめだ！」

咄嗟に彼は叫んだ。

その大声に気付き、彼女が振り向く。

驚きの表情。そこに穏やかな笑みが宿った。

大丈夫。

確かに彼女はそう言った。そして真白い手を取った。

途端、彼女の小さな体が、ぐんと引き寄せられた。

木の陰に姿を消す彼女。

彼は慌てて走った。巨木の陰に回りこむ。

しかし彼女の姿は何処にもなかった。

消えた少女。小さな町を揺るがした大きな事件。

それは時間が風化させた。

何時しか誰も彼女のことを口にしなくなった。忘れてしまったかのように。

素晴らしいことだと彼は思う。

当時の誰もの辛い顔と比べれば、笑えるようになった今の方がずっとマシだ。

けれどそれではやっぱり寂しい。

だから彼は時々神社にやってきて、彼女との思い出を懐かしんだ。

そしてその日も独り、彼は神社を訪れた。
訪れたはずだった……

「なんなんだここは」

啞然として、彼は辺りを見回していた。

暗く果てない空間。走る緑の線。

上下左右、四方八方。広がる線世界。

例えるなら、立方方眼紙の中とでも言おうか。

そんな異様なところに彼は座り込んでいた。

酔っ払うという感覚はこういうものなのだろうか。

視覚的な問題なのか、足下がおぼつかなかった。

自分という始点が酷く曖昧に思える。

彼は自分を取り戻そうと必死に思い出す。

「確か神社に来て、おまいりをして、それで声を聞いた。女の人の綺麗な声だった。その声は僕の名前を呼んで裏山へと誘った。それでお化けの木の前で急に……」

「そうだ、手を引っ張られたんだ。白い手に」

眩いた途端だった。空間に巨大な光の塊が現れた。

それは瞬く間に彼と、空間そのものを呑み込んだ。

眩しさにたまらず目を閉じ、顔を覆い隠す彼。

やがて光が薄れ、目を開いた彼は、再び啞然とした。

真っ白な世界。そこにヒトカタの巨大な光体がいた。

彼は具に理解する。ああ、ここは「あれ」の中なのだ。

目の前にある途方も無い、知覚を越えた存在。

それが何かを確かめる為に、彼は恐る恐ると語りかける。

「あなたは、誰ですか」

「私はニミュエ。アヴァロン界の女神」

透き通る声は、脳に直接染み渡った。甘美なほどに。

ああやはりと彼は納得する。そして何故か、目頭が熱くなるのを感じた。

無辺の中にそういうものが在ってくれる。

それがとても嬉しかったのかもしれない。

やがて女神は、深刻な口調で彼に話し始めた。

「タロー、あなたを此処へ呼んだのは私です。申し訳ありません」

「そうだろうと思っていましたが、でも何故謝るのですか」

「はい……実は……」

女神は小さく首を振った。

「実はタロー。あなたに折り入ってお願いしたいことがあ……って、え」？「

「え？」

ゴシゴシと目の辺りを擦りながら、女神はぶつぶつと呟き始めた。

「あれ、おかしいな。楽しみにとっておこうと思って目を閉じて作

業したから間違えたのかな」

恐る恐るといった具合に、女神は彼に尋ねた。

「つかぬ事をお聞きしますが、あなたはタロー様なのですか。東通り三番地、うらぶれ商店街の一番端のお米屋さんのご子息で、ブルンコと制服と縞パンが大好きな、ちよつとエッチなタロー様？」

恥ずかしい性癖が暴露されてしまった。

しかし彼は堂々と胸を張る。

「如何にもそのタロー様は僕だけど、それが何か？」

「いやあああああああああああああ！」

脳内に女神の絶叫が響き渡った。

「タローは？ あのタローはどこ？ くりくりまなこのバラ色ほっぺ。愛らしいタローはどこ！？ 私が探してるのは金太郎の体にキヤッチャーミットが乗った、こんな男じゃない！」

「誰がキャッチャーミットみたいな顔か！ …… って、まさか、お前ハナコか」

「……誰がハナコか！ 私は女神ニミュエだ！ お前、私は凄いだぞう！ 偉いんだぞう。あれだ、……とにかく凄いんだ！

……いやいや、そんなのどうだっていい。なんでこんな事に……。時の流れは無常だわって、いやいや、そんな黄昏てる場合じゃない。肝心のこいつがこんなじゃ、積み上げてきた計画が全部パーじゃないの……」

「にやろう、ハナコめ。何がしたかったんだ……」

情けない格好で木の根元に引つかかった彼。

夕暮れに染まる町を逆さに見つめながら、鳴く腹を摩り呟いた。

「……ああ、カレーパン食いたい」と。

その後彼女は黒歴史を葬り去る為に異世界より刺客を放ち、彼の暗殺に躍起になるのですが、そんな話を書くのは結構大変だし何より面倒なので物好きな人がいたら誰が書いてください。

おしまい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6399o/>

短編集

2011年11月5日06時20分発行